

寄せ場学会通信 9

1989年

10月

定価 100円

学会事務局 東京都杉並区善福寺2-6-1 東京女子大学松沢研究室気付 ☎03-395-1211 郵便振替 東京 8-117184

西日本事務局 京都市左京区吉田二本松町 京都大学教養部 ドイツ語研究室 池田浩士気付 ☎0775-73-4814 (自宅)

寄せ場としての笹島

藤井克彦 (笹島診療所)

「笹島」がどういふところか報告せよ、ということなので、述べてみたい(『寄せ場2』四八頁、全国寄せ場案内「笹島」参照のこと)。

1 朝だけの寄せ場

国鉄名古屋駅のすぐ南東に、水色のガラスのノッポビルがあり、東海道線から見える。これが住友ビルであるが、このビルの前に、名古屋中職安があり、ここを中心として付近の路上に七百から八百人の労働者が、早朝仕事を求めて集まっている。ここが、「寄せ場」笹島である。笹島で、現金仕事を求める労働者は、千名以上と思われる。他に、飯場・出張に行く人、直行の労働者がいる。これらの労働者も合わせると、二千五百人位であろうか。

職安前には、寄せ場のボスの存在である中井工業の車が並び、そこから寄せ場の入口、名古屋駅方向に人夫出し業者の車が並ぶ。その反対、中心から東にも車が並ぶが少ない。朝が早ければ、小さい新しい業者が多く、青カンしている労働者を主たる対象にし、賃金も飯も悪く、現場も遠い。他はほとんどが顔付けで、決まった人しか仕事に行けない。

日当は、最低九千円で、一万三千から一万五千円が多い。

職安は、六時四〇分にシャッターが開き、七時に求人を行うが、紹介件数は〇から三人で、八八年度合計は二〇二人とどうにもならない数である(一ヶ月未満の出張の紹介は、八八年度

が一〇七二人である)。日雇労働者被保険者手帳(白手帳)の所持者は、約千八百人で、八八年三月の千三百人よりかなりふえている。このうち、アプレ受給資格のある者は、約八八〇人である。

朝七時を過ぎると、仕事にアプレた労働者も去っていく。そして、九時にもなればオフィス街となってしまう。笹島には、かつてあったドヤ街も今はなく、朝だけの寄せ場となってしまう。

2 印紙貼付少なく、一時金もない

笹島で求人している業者は、百五十から二百社で、そのうち印紙を貼付するのは三〇から四〇社と思われ、多くの業者は印紙を貼らない。また、求人条件を明示した看板を車に掲げている業者はなく、口答でのやりとりである。なお、業者の手配師は、暴力団稲葉地一家に月三万五千円をシヨバ代として納めていると言われている。

他の寄せ場と違って、愛知県は、夏・冬とも一時金を出していない。県との雇用関係がないというのが、その理由だ。また仕事の方でも、山谷のような「特出し」はない。

白手帳を持っていても、印紙を貼ってもらえず、一時金をもらえないということになり、白手帳を持っていない労働者も多い(特に、高齢者、障害者等野宿に追い込まれている層)。

3 ドヤも少なく、野宿者多い

飯場に入っていない労働者が、どこに泊っているのか。報告も調査もない。アパートなどの人ももち論いるが、どの位の比率か不明である。それ以外の人は、笹島にドヤ街はないので、名古屋駅周辺のドヤやサウナなどに泊まることになる。以前は七百から千円のドヤがあったが、今は建てかえなどにより、千五百から二千五百円になっている。それにその数が少ないので泊まらないこともある。特に盆や年末年始は、予約しておかないとまずダメである。

数千円持っていない、仕事にアプレた時のことを考えて野宿する労働者もいる。ドヤに入りそこねた人も野宿することがあり、金がないともち論野宿となる。

野宿に追い込まれている労働者は、名古屋駅周辺で百五十人前後、名古屋駅から地下鉄で二つ先の繁華街栄付近に、五〇から七〇人が確認されている。年末年始には、飯場帰りの労働者などがふえて、四百人近くが野宿せざるをえない状況となるが、我々のたたかいの成果でなされている無料宿泊所に三百人前後入るので、百から二百人が野宿に追い込まれている。

4 健康を破壊され、死に追いやられる労働者

昨冬の越冬医療活動において、受診者の推定病名で多いのは、腰痛、関節炎(痛)、骨折及びその後遺症など筋骨格系疾患が

二二%、風邪、喘息、肺炎などの呼吸器系が二〇%、胃腸炎、潰瘍、肝疾患など消化器系が一八%、高血圧、心疾患などの循環器系が一五%で、他は一〇%以下となる。この数値は、病状の軽重を無視した場合であり、就労が無理であると判断された入院・入寮の場合の病名を見ると、筋骨格系二〇%、循環器系二〇%、消化器系一三%、結核一%、糖尿病などの内分泌代謝疾患一〇%、アルコール依存などの精神疾患一〇%、呼吸器系六%となる。

先ず注目すべきは、筋骨格系疾患が多いことであり、建設労働に寄因するものであるが、安全対策が不十分であったり、受傷等した後きちつと治療できない状況に置かれていることが問



題である。次に結核が多いことが注目される。しかも結核患者が、十二畳に十人も詰め込まれる無料宿泊所に入れられていることも起こっている。第三に、高血圧、糖尿病が多い。更に、アルコール依存症も少なくはなく、他にもアルコールの影響があると考えられる。

我々が確認しているだけでも、年に二〇から三〇名の労働者が、路上で、病院で亡くなっている。仕事のできる間は、劣悪な労働条件下でこき使われ、安定した生活条件も保障されることなく、身体が不調になっても就労不可と言われるまでは野宿を強要される。医療機関と言っても、差別的な対応をし、内科の入院のつもりが精神科に入れられたりする労働者もいる。

尚、笹島診療所受診者の平均年齢を見ると、四五・六歳（七九年）→四六・二歳（八〇年）→四六・〇歳（八一年）→四七・三歳（八二年）→四八・一歳（八三年）→五〇・四歳（八八年）となり、寄せ場の高齢化を示しているようである。

5 笹島でのたたかい

一九七六年一月、私も参加していた「どっこい！人間節」を上映する会は、名古屋駅周辺で年間十数人の労働者が餓死・凍死していくことを知り、炊き出し活動・医療活動を開始、七七年十月からの名古屋駅構内夜間締出し反対闘争を通して、名古屋市に年末年始対策をさせることに成功（三名の日雇労働者が逮捕され、一名起訴され裁判闘争）。

七八年八月暴力業者問題を契機に、名古屋寄せ場有志の会と名古屋日雇労働者支援会議（旧上映する会）とが労働問題に取り組む。八一年一月、第六回越冬闘争の盛り上がりの中で、笹島日雇労働組合を結成。八二年六月日雇全協結成と同時に、笹日労となる。

第九回越冬闘争の八四年一月、前日の無料宿泊所入所拒否に抗議する為、越冬実が民生局に行ったところ、三名が不退去罪で逮捕。この不当弾圧は全国的な批判を呼び、支援の輪は大きく広がる。一方通年の医療活動を目ざす動きも出、その計画が広がって、八五年十月笹島労働者会館を設立（一階ささしま食堂、二階笹日労事務所、三から四階笹島診療所）。

現在、労働問題を中心に、笹日労が取組み、医療活動は主として笹島診療所、炊き出し（地下鉄名古屋駅構内で行う）はカトリック、プロテストメントの三グループが中心。八八年五月中学生の度重なる襲撃にたまりかねて反撃した労働者のことを契機に結成された「野宿労働者の人権を守る会」は、夜間パトロールをしている（栄地区で野宿している労働者のことに取り組むグループもある）。

××××××××××××××××××××××××

笹島には、ドヤ街がなく、「地域がない」。行政は、私たちのたたかいによってやり始めた「年末年始対策」しか行わず、しかも「住所不定者」対策と考えている。



マタサイタ
サクラガ
マタサイタ

聞いたか
社会がワイルドの
もちろんオレたちも
ワイルドだよ〜

笹島労働者の置かれている状況は、まだまだ明らかにされておらず、たたかいても不十分だ。地域のない寄せ場で、寄せ場労働者がたたかう状況をどうつくるのか。十数年経っても、重い課題である。

（ふじい・かつひこ）

「労働力」でなく「人」として

7月29日、東日本支部例会の感想

七月二十九日の東日本地区例会は、東京女子大に、朝日新聞社の中野隆宣氏を招いて行われた。中野氏は、西ヨーロッパにおける移民労働者問題を現地取材され、得られた知見と体験を踏まえ、特に西ドイツにおける実情について述べられた。

今日の日本と同じく労働力不足を背景として移民労働者を受け入れてきた西ヨーロッパ諸国の歴史、帰国の奨励に至った現状、再生産されていく移民社会の人口、それに対する民主的な政策とちがつく排外的な本音との葛藤などについて、中野氏は、広く紹介された。中野氏が着眼されたように、西ヨーロッパでの近現代における移民の受け入れについて考えることが、今日の日本社会が直面する、東南アジア、中国など第三世界諸国からの出稼ぎ労働者への対応の問題に対して、その対応が肯定的な人であれ否定的な人であれ、「より良き道」を考えるヒントを与えてくれる道筋となることは言うまでもないだろう。

中野氏の広範に広がる報告全てをコンパクトにまとめて紹介する余裕もないので、ここでは氏の報告から触発されたこと、一点についてのみ述べておくことにする。

現在の「外国人労働者問題」をめぐる議論に最も欠けていることは、出稼ぎ民たちを「人」として見るというあまりにも当り前の前提である。「社会不安」を理由に受け入れに反対する反対論に、受け入れ賛成論が「労働力不足」による必要論をも

って対置される議論の内には、出稼ぎ民の存在を「危険分子」あるいは「労働力」などという数量に置き換える「人を人としてみない」不可思議な人間観が貫かれている。何も道徳的に批判しているのではない。人が人であり、喜び悩み憤る「生」の存在であることを無視しては、何も見えてこないということが言いたいのだ。勿論、外国人問題に関わり発言している人々が皆そうである、などと言っている訳ではない。彼ら／彼女らの人権を守るためのネットワークの存在とその活躍を、私達は知っている。しかしながら、この社会ではどうやらそのような言説は、流行らないらしい。

中野氏の報告の中で見ることができたのは、西ヨーロッパにおける排外主義への歯止めとしての、民主主義のイデオロギーであった。たとえそれが建前であったとしても、建前を守ろうとする規範が、その社会に共有されることで「人を物としてみる」矮小化が少しでも避けられ、人権という言葉も説得力を持ち始める。出稼ぎ民を、必要—不必要の対立軸の上に乗せて考えるのではなく、受け入れと同時に、民主主義（的諸制度）を日本社会に育てていく文脈のもとで考えていく必要がある。そして、そのような民主主義の前提なくしては、出稼ぎ民にとっても不幸な事態を招きかねないのである。

釜ヶ崎・夏祭りはおわった

和田研三

第十八回釜ヶ崎夏祭りは八月十二日から十五日までの四日間（前夜祭を含み）、西成区萩之茶屋の三角公園で行われた。心配された雨も、最終十五日午後八時からの追悼慰霊祭に至るまではスケジュール進行をさえぎるほど降ることもなく、まずはつつがなく終わったといっている。ただ、つつがなく祭りが終わるといふことに対し、何かしら心のなかにしこりのようなものが残るのだが――。

それはともかく、寄せ場学会（西日本支部）としては今年が二回目の本格的参加の夏祭りである。日頃の学会活動と少しは連動させたかったが、残念ながら、夏祭りというスケジュールがあるから単に何かをやった、という感がぬぐえない。しかし、それはしょうがないことなのだろう。設立三年目とはいえ、寄せ場学会は、たしかにまだ、建ち上がり、の段階を過ぎてはいないのだと思う。道行する周囲の状況を追いかけながら、そしてまたその状況の個々に関与しあうことで、わたしたちは学会活動（支部活動）の骨組を造りあげていくしかないだろう。

真に問題なのは、そうした学会活動（支部活動）の骨組を形成するための契機として、今年の夏祭りを十分にいかせなかったという点ではないか。端的に言えば、人が集まらなかった。昨年に続いて今年もパネル出展を行ったにもかかわらず、パネ

ル作製作業についても、祭りへの「結集」についても、昨年の数を下回ってしまった。会員への告知や企画の問題、事務局体制の問題として、少しばかりシビアに考える必要があると思う。もっとも、パネル自体はわりと好評だったようだ。やはり「労災」という、労働者にきわめて密接なテーマを取りあげたからだろう。ここで、支部のパネル作製に至るまでの経緯を簡単に報告しておこう。

七月十六日、大阪・芦原橋の同和地区総合福祉センターで行われた支部例会で、ひと月後に迫った夏祭りへの取り組みが議題に上り、「労災」をテーマにパネル出展することがすぐに決まった。これは今年四月に宝塚で起きた「生き埋め労災死事件」を意識したものである。ちなみに昨年のパネルのテーマ「差別と天皇制」は、その直前にあった「南津守地区における釜ヶ崎差別をテコにした住民運動」を意識したもので、昨年も今年も釜ヶ崎の現状から最も関心の深いタイムリーなテーマを選んだわけだ。いわゆる、夏祭りじたいの大テーマの先取りと言える。

（注1）

七月三十一日には、釜ヶ崎内で（人数は少なかったが）会員が集まり、パネル作製へ向けた中間集約を行った。前夜祭の八月十二日に一部でき上がり、完成したのは翌十三日の午後だっ

た。この日程進行は、完成が十三日にずれ込んだことまで含めて、昨年とまったく同じである。パネルの内容は次のとおり、

- 労災書式一式（申請用紙等）○労災の手続き等の説明（あいりん地区労働福祉センター発行の「センターだより」から転載）
- 簡単な労災統計（建設業従事者の比率が高いことを示すもの）
- 高野山建設労働者慰霊碑の写真○滋賀県堅田駅に置かれた鉄道敷設従事者慰霊碑の写し全文と解説○一九六六年十一月の尻無川水門工事事故の写真（パンフから転載）と説明○一九七七年六月の柳井建設飯場火災事故の新聞コピー（注2）

なお、宝塚での生き埋め労災死については釜日労がパネルで詳説した。

これらの展示内容のうち、「センターだより」から転載した部分に、労働者どうしの会話として「どうした？ ビッコをひいてるやないか」という表現があった。これに対し夏祭り実行委員会の構成員でもある「釜ヶ崎を支援する会」のメンバーより、次のような指摘があった。

「これそのものを取り上げて差別だ云々と言うつもりはないが、釜ヶ崎にも障害者は多く、まして夏祭りであれば他から障害者もやって来る。かれらがこの表現にどんな思いを抱くことか。学会が釜ヶ崎と深く関わっていいこうというとき、こういった表現にもっと敏感であることが必要ではないか」

いあわせた学会メンバー三人は協議の末、現場判断によって、指摘そのものと、この指摘をしっかりと受けとめることを寄せ

場の仲間とともに確認したい。旨の文章をパネルに併記した。

最終十五日の夜八時半、最後の盆踊りが始まると、祭りの締めである花火大会が時間を繰り上げて行われた。わたしたち学会のメンバーは、画鋲で止めていた自分たちのパネルを丁寧にはずしていった。昨年のもものように保存するつもりだったのだ。だがわたしたちが、ひとまずパネルを近くに置いてゴミ掃除や後片付けをしている間に、おそらく誰かがゴミと間違えて処理したのだろう、パネルは姿を消していた。こうして夏祭りは、まさに、あとかたもなく終わってしまったのだった。

（注1）夏祭り実行委員会の討議によって、最終的に今年のテーマは「差別と排外の嵐を打ち破り／アジアの仲間と共に！」となったが、当初は「仲間の死とともに生きる！」など労災死を直截に訴えるテーマが候補に上っていた。

（注2）柳井建設の飯場は大阪市大正区にあった。事故は失火（タバコ？）によるもので、寝泊りしていた労働者十二人が焼死、柳井建設社長は労働基準法違反で処分されている。飯場の火災事故が労災にあたるということは、日雇労働者の労働の在り様、あるいは労働と生活という問題を考えるとき、示唆するものを多分に含んでいると思う。基本的には、釜ヶ崎のような寄せ場に生きる労働者には、ドヤ火災の死傷においても労災が適用されるのが筋であるはずだ。

（わだ・けんぞう）

日本寄せ場学会・秋季シンポジウム

「寄せ場の変容と歴史……」

釜ヶ崎には佳点を△口わせて」

日時：十月二十八日 土曜日 午後二時より

場所：部落解放センター（JR芦原橋駅下車 西へ徒歩5分）

パネル内容：

「寄せ場と出稼ぎ労働者」 八木正／金沢大学／折衝中

「釜ヶ崎の変貌と現状」 釜ヶ崎日雇労働組合／折衝中

「文献・資料でみる釜ヶ崎」 平川茂／釜ヶ崎資料センター

「〈労働者〉概念と差別の起源」 松繁逸夫／釜ヶ崎差別と闘う
連絡会議

基調提案／司会進行／小倉利丸（富山大学）

西日本支部例会のお知らせ

日時：十一月五日 午後一時から

場所：京都大学教養部A号館中央三階ドイツ語セミナー室

悼む

小説『水車無宿』の著者である名古屋の山本壽雄さんが、六月十二日に膀胱癌のために、亡くなられました。

元山日労委員長で、山谷の「働く仲間の会」のメンバーである中西さんが、十月六日深夜に交通事故のために、亡くなられました。

心より御冥福をお祈りします。

編集後記

・西日本支部の事務局が移動しました。新しい事務局の住所は、次の通りです。

京都市左京区吉田二本松町

京都大学教養部 ドイツ語研究室 池田浩士気付

・通信の発行が遅れて、申し訳ありませんでした。

・次号の発行は十二月上旬の予定です。投稿原稿の締め切りは、十二月五日です。会員の皆様の投稿を歓迎いたします。通信に關する意見・感想等、どんどんお寄せ下さい。

(N)